

八重山広域市町村圏事務組合設立20周年記念
人材育成事業黒潮塾

書に親しむ ～南龍先生とともに～

『書は夢の扉をひらく』

(講演要旨) 中

私は昭和14年の3月31日生まれです。誕生日が来ると73歳を迎えます。私の人生の中で定年はなく、やればやるほど夢がわいてきます。さらに自分の思いの丈を書き残せるという仕事に恵まれ、こんなうれしいことはありません。そして、日展に挑戦する人たちが日本の津々浦々にいます。そんな思いで先生方とひざを交えて懇談したり、作品を出して競争しています。自ら学ぶうちに今度は、全国の先生方が教えている子どもたちに、沖縄の子どもたちを挑戦させたいと思うようになりました。それが、28年前からス

門弟たちが出てきたなということがうれしいのです。『書は夢の扉を開く』。何でもない言葉のようですが、それぞれの道に合わせていただいても結構だと思いません。必ず、強く思えば思うほどかなえられと私は信じております。小学の低学年が人生

子さんが小さい時からどのようなことに一番興味を示していたかということを知っていたことは大事かと思えます。私は、初めて中国大陸を見たとき、打ちのめされました。小さいとき、よく床の間に掛けていた山水画を見たから、これはうその

ばらしい漢詩や、言葉が生まれるんだな」と思えてなりませんでした。そして、自分自身が生まれた石垣島は小さいけれど、とても豊かであるということに気づくのです。ですから、離れていればいるほど石垣の素晴らしさを知るのです。これは、芸

男として年を取ったらあまり母さんのことを言わない人が多いじゃないですか。私は、うそをつかずに常に母さんって大事なんだと言い続けてこまごま言いま

感謝の念を述べました。私がなぜ「母さん」というのかとうかと言うと、母さんは家に居て、最高の母さんなんです。そして、永遠に私の心の中に母は生き続けます。母さんにあの貧乏の時代があつたが「早く喜ばせてやりたい」という強い思いが、力にな

全部わかなければいけない。こうなってくると、変な道を選んだなと後悔しました。けれど、これは逃げられないと分かった時にですね、何をしたらかという、朝起きたら仕事を、ご飯を食べて眠る。この日々の勉強を大事にしようと思ひかけました。そして、一日一日の努力はいつか実を結ぶことを、日展で初の特選受賞で実感したのです。



人生の中に定年はない

努力はいつか実を結ぶ

の中で最も大事な時期だと、私は思えてならないのです。いろいろな文化人の方々と会うのですが、ほとんどが共通しているという事です。早いうちから自分の大好きなもの、自分の大好きな教科は何かということ。お父さんやお母さんたちは、お

絵、空想なんだと思っていました。書を学ぶとどうしても母国へ往来をせねばなりません。行ったら目の前に山水画のような景色が広がっています。これはうそではなかったと気づかされました。「ああ。人ってそういうところに住むことによって、す

術の世界で大いに通用する自然に恵まれた島であるということを誇りにしているということとです。私は、なぜ今になれたかという、原点を探ってみたら、やっぱり「母さん」です。「母さんって、すごいなあ」といつも思っていました。が、大人として、

亡くなった姿を見て、狂うかなと心配をしていました。が、冷静に見ることができました。そして母さんに言ったことは、「母さんは日本一偉い母さんなんだ」と。

「あなたが、私のような息子を生み育てたがために、今日があります」と精いっぱい



講演：書は夢の扉をひらく
主催：八重山広域市町村圏事務組合 横成市町、石垣市、竹富町
実演で書いた「書は夢の扉を開く」の作品を外間町長に贈呈（与那国町保健センター）